09年10月４日

シバサシ

宇検村阿室

写真・文　山中順子

カミギンを供え、風を通し、今年も無事にシバサシを迎えられたことに感謝する森山タツエさん

シバサシの朝、東に向かって供えられた高膳とシバサシギンに朝陽が射し込む＝福元千草さん宅

10月4日（旧歴8月16日）午前5時。宇検村阿室。まだ明けきらぬ集落では「シバサシ」が始まっていた。八月初丙（ひのえ）の日のアラセツから7日後の壬（みずのえ）の日に行われる伝統行事。シマの中央にあるミャー（祭り広場）の土俵脇に真っ赤な火が灯され、チヂン（小太鼓）と八月踊り唄が響き渡る。

大きいノロの存在、集落の伝統行事やまとまりに不可欠

「アラシャゲ」で始まり、土俵を囲んで「芦検坊々ぜ」「柳葉」「キューヤ（喜界）湾泊り」の4曲を東の空が明けるまで歌い、踊った。合い間にはお茶、焼酎、塩、イカの干物が配られた。

阿室は30世帯67人。三方を山々に囲まれ、集落の奥まったところにわずかに畑が残る。隣りの平田集落の境にあるカミヤマにはシマタテガナシがばれる。アラセツとシバサシの日は松明（たいまつ）をともし、朝5時から踊り始め、その間の5日間は夜の8時ごろから1時間以上連日踊る。昨年までは午前4時から始まっていたという。

シバサシギンを拝む家は前日のまだ明るいうちに高膳にミシャク、焼酎、線香3本を供える。盆に迎える先祖は線香2本。祖先とシバサシの神様では線香の数が違う。代々父系列で相続され、その家の主婦が拝む。門口でわら束に火をつけ、チカラグサでたたいて炎を消し、煙を立ててコーソガナシ（祖先の神様）を迎える。家々の四隅にススキを挿して悪霊払いをし、シバサシギン（ハブラギンなどと呼ぶ）、カミギン（神衣）、カカン（スカート）、サジ（鉢巻のような長い布）、ドギン（胴衣）などを取り出して、五穀豊穣祈願とシバサシの神を祭る。年に一回の伝統行事。6軒の家で行われており、各家々では4―5枚のシバサシギンを東の方向に供えて拝む。

同村でただ一人のノロ下村タエ子さん（82）と二人暮らし。代々ノロを継承してきた下村家に嫁ぎ、1959年（昭和34）年に「自分や家族、集落のためになるのなら私が拝みます」とノロを継承。以来、50年にわたって集落の祭祀を司ってきた。現在行っている祭祀は①4月初午（うま）の日に行う初ハマオレ、中ハマオレ②6月のキゼェ③8月第3日曜日の豊年祭④ミシャク―1916年12月の大火後から師走2日（現在は新暦の12月2日）に行っている大災祈願―の4つ。1月2日の「アシャゲ祝（ゆ）」は4年ぐらい前にやめたという。

タエ子さんは「昭和22年頃はグチヌシュ（男性の神役）、アタリ（当番役）3人はカネクドゥネ（金久）、シラマドゥネ（白間）、シモドゥネ（下）から選び、ノロも5人いたよ。宮畑モトマツというすごい神様がいて、いろいろ教わった。昔は祭りの時、各家々が米を一合ずつ持ち寄って祈願し、そのお米をノロたちが分け合った」と昔を振り返りつつ、「与えられた運命だから、体が丈夫なうちはこれからも頑張ります」と話した。

山畑キクエさん（91）は年に一度、シバサシの日にだけノロの衣装を出し、風を通す。「昔はミキやアオウルメ（アジ）の干物を用意してシバサシの神様も迎えましたよ」と話し、「今年も煙に乗って拝まれてください」とシバサシ前日の夕方、わらに火をつけて迎え、この日「トートガナシまた来年も降りてきて拝まれてください」と送りの火をわらにつけ、煙とともに空に向かって見送った。7年前に夫の直三さんを亡くし、二男邦彦さん夫婦と3人で暮らす。

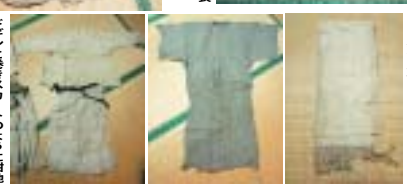
「シバサシノカミサマライネンモオイデクダサイ」と線香を3本立てて拝んでいるのは森山タツエさん（82）。「昔からのものだから大切にしないといけませんね」と伝統を守っている。福本千草さん（77）は「郷土研究の方々が来て調べたりしていますが、今でも何がすごいのかよく分からないね」と話しつつ、毎年シバサシの祭りを継承している。このほか、浜畑サカエさん（83）、保枝久信さん（76）もシバサシギンを保存している。

保枝隆雄区長（72）は「昨年シバサシギンを祭る家は7件あったが今年は6件。豊年祭や伝統行事においてノロ神様の存在は大きく、下村さん（ノロ）がいないと集落はまとまらない。阿室はユイ（助け合い）の心で団結していて、小さくても大きな集落。伝統の祭りを大切に残していきたい」と語った。

山中順子（やまなかじゅんこ）　写真家。2000年から奄美群島に通い続け100歳の長寿者や伝統行事などを撮り続ける。「奄美手長」の編集・発行や奄美の素材を使った特産品もプロデュース。著書「写真集　奄美100歳　母なるシマ、生命の島」など。

シバサシお膳。線香は3本。ミキが3つあるのは祖先の分とシバサシの神様用（右）。森山さんと娘さん（左）

ドギン（胴衣）。内側は深い緑色で表側は金色。素材はシルク


ドギンと巻きスカートのようにまとう組地の紐がついたカカン（左）。芭蕉布で織られたハシャギン（中）。帯・腰巻（右）

クミスクチンを栽培する森山利夫さん。ノロギンを祀っているタツエさんも販売を手伝う

福元さん所有の琉球紅型のドギン（左上）。シルクのように滑らかなドギン（右上）。芭蕉布で織られた一畳を上回る薄手のシバサシギンと福元さん（右）

シバサシ火。松明をともし、未明からシバサシが始まる。アラセツとシバサシの朝のみ松明がたかれる

踊りに添えられる茶、焼酎、塩、イカの干物（右）。午前5時、アシャゲの前のミャーに集まり、全員で唄い、踊る（左）

シバサシの神様に感謝する山畑キクエさん。3本の線香にミキ、焼酎が供えられている

「父が造ったこの家や志を残していきたい」話す山畑邦彦さん

海沿いの雑草の中から柴（ススキ）を切り出し、自宅の四つ角や納屋にススキを挿す窪茂成さん（80）

シバサシの日のトネヤ。祭りの振り出しや祈祷はここが舞台となる

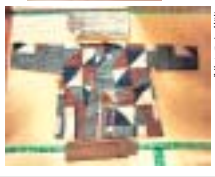
ノロの「共同墓」。親ノロ、ノロ、グジ主が同じ墓に眠る

集落内を走るカミミチ（右）。秋葉神社の上にある聖地シマタテガナシ（左）。

下村さんが保存しているシバサシギン

「来年のシバサシの日に、また降りてきてください」と祈願するタエ子さん（下）。「シバサシの神様は煙を伝ってお帰りになる」とタエ子さん。わらに火をつけ、根の付いたチカラグサで消し、煙を上げる（右）

浜畑サカエさん宅のノロギン。サジと呼ばれる鉢巻のような長いヒモ、腰巻、襟なしのドギンと3点残る（右）。線香3本、ミキ、酒の3点セットは他の方々と共通している（左）。



集落が見渡せる秋葉神社の下手に火の見小屋。1966（昭和41）年建設

秋葉神社。1916（大正5）年12月2日の大火の後から祭るようになった

集落でただ一人のノロ下村タエ子さん。祭壇にはシバサシの神とノロ神を祭り、祖先の仏壇と炊事場の水の神は別々に祭っている

山畑キクエさん宅。ハブラギンと呼ばれるドギン（胴衣）や芭蕉布など4点が祭られている。三角は線を意味し、魔除けとされる（左）。シバサシの神様を見送り、「来年もまた来てくださいね」と手を合わせるキクエさん